

# わかりやすい教科書を目指して

北海道教育大学 名達 英詔



(図1) 新版教科書5・6上P21  
「ぬのから生まれた形」より  
子どもと先生が学習の流れを理解し  
やすいページ構成。



(図2) 新版教科書3・4下P26・27  
「ゆめの世界のゆめの家」より  
鑑賞と表現が結びついたページ例。



(図3) 新版教科書5・6上P21  
「ぬのから生まれた形」より  
新たな形を出現させるおもしろさ  
や楽しさを体験する。

## 「立体に表す」ページの基本的な考え方

「子どもたちや指導する先生方にとって学習のねらいや評価のポイントがわかりやすい教科書にしたいですね」

今回、「立体に表す」ページを編集するに当たり、担当者からあがった声です。新学習指導要領に示された事項を踏まえ、実際に使っていただくお子さんや先生方が立体に表現する楽しさやよさを十分に味わいつつ、学習のねらいや具体的な活動の姿、評価のための目のつけどころなどがわかりやすい誌面を目指し、以下の点に留意しながら編集に取り組んでいます。

### ■学習の流れに沿ったページづくり

時間の経過とともに次々と変わる子どもたちの活動。思考、判断、表現する子どもの学びはそうした活動の中で得られます。子どもたちにとっては自ら学習のめあてに気づきながら学べるように。また、先生方にとっては活動中の支援や評価の観点が把握しやすくなるように。活動に導く子どもたちへの投げかけの言葉から始まり、題材の目標に結びつく子ども自身の言葉、試行や発見をしている様子、そしてふりかえりの視点まで、用具や技法、安全等の注意点、片づけ方とともに学習の流れに沿って実践的に示しています。

(図1)

### ■立体に表す楽しさやよさを十分に味わえるように

「立体に表す」の醍醐味は、材料に直接触れ、様々な感覚や技能を統合的に用いながら、空間的な奥行、形や色、動きの変化、動感や量感、構成やバランスの美しさに親しみ、発想、構想して表現することにあります。発達の段階に沿った豊かな材料経験や表現方法との出会いとともに、そうした立体ならではの楽しさやよさを子どもたちが十分に味わえるよう配慮しています。

### ■活動を支える柱、材料、行為、想いをもとした題材をバランスよく

布や紙、液体粘土など材料の特徴に触れることをもとした活動、切ったり、積んだり、削ったりといった行為に出会うことをもとした活動、空想したり発想したりする想いをもとした活動。材料、行為、想いは子どもたちの活動を支える3つの柱です。「立体に表す」ではそうした柱をもとした題材をバランスよく配すように心掛けています。

### ■鑑賞と表現を結んで

見てつくり、つくりながら見る。子どもたちの学びは表現活動の中で鑑賞と表現を相互に関連させることによって膨らみます。表現の方法だけでなく、学習の流れに沿いながら、自分自身で表現を見つめたり友達と見合ったりする姿に光を当て、具体的に示すことで、子どもたち自らが鑑賞と表現を結びつけながら活動できるよう図りました。また、活動のきっかけや発想を膨らませるヒントとなるよう、風景や建物、人物など、題材に関連した鑑賞用写真を掲載しましたので活用していただければと思います。(図2)



(図5) 新版教科書3・4上P13  
「切っけずって」より  
かきべらで削り取った跡を試しな  
がらイメージを膨らませる。



(図6) 新版教科書1・2上P25  
「どうぶつさん だいのすき」より  
大好きな動物を粘土でつくること  
で技能が身につく。



(図7) 新版教科書5・6下P15  
「取り出した形」より  
抵抗感のあるかたまりをほる、中  
学校にも通じる作品例。



(図8) 新版教科書5・6下P30・31  
「12年後のわたし」より、  
上と同じように中学校とのつながり  
を意識した、心材を利用した作品例。

## 「立体に表す」ページの特徴について

### ■形としてのおもしろさ、楽しさを追求

布は厚みこそあれ、もともとは平面状のものです。その布を折りたたんだり、丸めたり、詰め物を入れたり、ひもで結わえたりすることで空間に立ち上がり、立体としての姿を表します。針金などの線材もそうですが、立体ではなかったものに手を加え、新たな形を出現させる、つくりかえ、多様な形を発見する。そうした立体としての形のおもしろさ、楽しさを追求することで子どもの造形感覚は豊かになっていきます。(図3)

### ■平面と立体の融合

子どもたちの表現には平面と立体の区別があいまいなところがあります。自らの表現したい思いに素直に反応し、平面の上で立体物の配置や組み合わせを試したり、立体部分を取り囲む世界として平面に絵を描いたり。平面と立体を融合させていくことで平面だけでも立体だけでも得ることが難しい表現の世界に浸ることができます。(図4)



(図4)  
新版教科書1・2上P34・35  
「はこのなかまたち」より

### ■試す、他方向から見る

切り糸が粘土にくいこみ、切り取られた部分を開いてみると不思議な形が出現。かきべらで削り取られた跡がおもしろい。いろいろな方向から見ると違った形やイメージに出会えます。様々な材料やつくり方を試したり、いろいろな方向から眺め、思いがけない形を発見したりすることで、試すことや物事を多角的にみる楽しさやよさを知ることができます。(図5)

### ■子どもの好きなもの、身近なものをつくる活動を通して技能を身につける

粘土を丸めたり積んだり並べたり、その姿を思い浮かべながら大好きな動物をつくったり。小さな子どもたちにとって好きなもの、身近なものをつくることは喜びと親しさを伴います。技能は子どもたちの喜びや親しさに支えられた自然な表現欲求による活動の中で求められ、発見されることによってその子の能力としてよりよく身につけられます。そうした考えから、子どもたちの発達や生活に即した題材を大切にしました。(図6)

### ■中学校とのつながり

将来の自分を思い描き、設定した場面や構図をもとに心材を計画的に扱う、抵抗感のある材料を削ったり磨いたりしながら形の美しさを追求。中学校とのつながりを考慮して、この時期の子どもたちにとって関心が高くなる新しい知識、技能を知ることや今まで扱えなかった手ごたえのあるものに打ち込むことを中心に、今の自分を見つめ、広い世界、将来に想いを寄せること、表現することの意味を問い、多様な表現を構想し、実現していくことへと導ける題材設定を行っています。(図7・8)

以上のように「立体に表す」では、子どもに寄り添いながら立体としての特性を生かした学びが展開されることを願い、実際の授業で使いやすくなるよう配慮して編集を進めています。

# つくる面白さ，生活を楽しく豊かにする喜び

信州大学 橋本 光明



(図1) 新版教科書3・4下P10・11  
「コロコロガーレ」より  
ビー玉を転がす仕組みの違いによ  
って材料やつくり方，遊び方も違  
ってくる。



(図2) 新版教科書3・4下P32・33  
「べんりなマイボックス」より



(図3) 新版教科書1・2上P24  
「プレゼントをどうぞ」より  
つくったもので会話ははずみ，生  
活を明るくものにしていく。

## 「工作に表す」ページの基本的な考え方

従前の「つくりたいものをつくる」が，新しく「工作に表す」活動にまとめられました。日文 図画工作では，この工作に表す活動を生涯学習の視点や生活とのかかわり，小・中学校に共通に働く資質や能力の育成などの視点から捉え，継続性や一貫性を配慮した題材設定や配列を重視しています。そこでの基本的な考え方は，下記のとおりです。

- 子どもがつくりたいものを見つけたり，明確にしたりするきっかけを大事にする。夢や願いを語るとき，材料を加工するとき，組み立てや構成する過程，友だちや家族，生活などに関わるときなど多様な場面を提示する。
- つくる目的や用途などについて形や色，イメージなどを手掛かりに発想，構想したり，計画を立てたりする表現の過程を一層重視する。(図1)
- つくるものをよりよく実現するために，材料や用具の特徴を生かした安全で正しい使い方や，さまざまな表し方を工夫するときに働く創造的な技能やその活用などが分かるようにする。
- 遊ぶもの，使うもの，伝え合うもの，飾るものなどをつくるだけでなく使うことに意味や価値を見出すことによって，自他や社会と豊かにコミュニケーションし，生活に明るさや潤いなどを与えることに気づくとともに，我が国の伝統文化の継承と創造や，諸外国も含めた美術文化や表現の特質などについての関心や理解を深めるようにする。(図2)
- 子どもの発達の段階に応じて，各学校段階の内容の連続性に配慮した題材を設定して，学習への親近感，学習の円滑な移行，材料や用具の習熟などを図る。

## 「工作に表す」ページの特徴について

### ■“生活を楽しく豊かにする”多彩な学習内容

人間のプリミティブな生活の基盤形成に工作の営みの原点があります。手や道具を使い，感性を働かせ，知恵を出し合って自他ともに高め合い，豊かな生活や文化を築いてきたことを重視して“生活を楽しく豊かにする”ことを工作の学習の基底に置きました。これによって各題材において子どもが生活を多面的にとらえて探究心旺盛にイメージを広げながら創造的，能動的に関わっていく内容が多く盛り込まれています。

第1学年から順次，自分の思いを伝えたり交流し合ったりすることができる場や内容を取り上げて，生活と工作との関連を深めています。

1・2上「プレゼントをどうぞ」では，身近な人へプレゼントする喜びと楽しい会話，それを飾ったり使ったりすることで潤う心の交流と明るい生活への広がり期待できます。また，つくりはじめから渡す日までの子どもの気持ちや相手を思う心を大切にしてプレゼントの形を発想したり，入れるものや添える言葉などを工夫したりする学習を取り入れて，工作与結びついた生活の楽しさを味わえるようにしています。なお，就学前のお誕生日会やお年寄りなどへのプレゼントづくりとの連続性も考慮して題材を設定しています。(図3)

(図4)  
新版教科書1・2下P13  
「ワクワクがっき」より



### ■つくる目的を明確にした題材

工作に表す活動は、およそつくる目的をはじめからもって表現活動を展開する学習です。生活に使うものや空間を飾るもの、未来の世界への贈り物など、おおまかな特徴や機能などをはっきりもってからつくります。

そこで、日文 図画工作の工作に表すのページを開いたときに「誰が」「どこで」「どう」使うのかなど、つくる目的につながる作品や情景写真、図、文章などを効果的に掲載しています。1・2下「ワクワクがっき」では、材料の選択から最終目的の楽しい演奏会までの学習の流れがひと目で理解できると同時に、みんなでいろいろな楽器を自由に考案してつくるのがすぐに分かり、創造的な技能を発揮するための時間に多くを費やすことができます。(図4)

### ■イメージしたものを具現化するためのスキルの獲得

創造的な技能を育み、発揮できるようにするために試行と計画性、材料や用具の提示と選択、その扱い方と発展性などの観点から図や写真などで補説することで、子どものつくるものの内なるイメージを、外に視覚化、具現化するために有効なスキルを獲得できるようにしています。

3・4下「とび出すメッセージ」での簡単な仕組みを試しにつくってみることや、「便利なマイボックス」の出来上がりを予想した簡単な図と完成作品との比較などから先を見通したつくり方ができるようになります。(図5)

### ■図を読み取る力を身につける

情報化時代にあって図や写真などを読み取る力が求められています。低学年から楽しんで図を見たり、つくり方を友だちと話し合ったり、試しにつくったりすることで次第に読み取る力が育つことから、1・2上「みんなでかざろう」の「はさみのもちかた」の図の導入から5・6下「織る、編む、組む」の図に至るまで、発達や順序性、難易度などを考慮してできるだけ多く掲載しました。図を参考にしてはさみを実際にもち変えたり、紙ひもでも組み始めの部分に挑んでみたりすることの日常化を期待しています。

前掲の「便利なマイボックス」は、それぞれの目的が異なる図解を複数掲載しています。授業において指導者と子どもが一緒になって読み取ることで教科書の活用が一段と高まります。5・6上「使って楽しい焼き物を」においては、日常では目にすることが少ない焼成用の材料や用具、焼き窯などを写真で示してイメージと結びつけて読み取るようにしています。(図6)

### ■中学校へつなげる題材

〔共通事項〕が示されて小学校と中学校の連携が一層重要視されています。

年間指導計画に位置づけられた題材ごとの子どもの学びは、次の題材や学年へと関連し総合的に働き、生涯にわたっていくことはいうまでもありません。このことを踏まえて5・6下「ドリームプラン」は、中学校へつなげる題材として特設されました。よさや美しさを求める造形活動は、社会や環境に対して働きかけながら、子ども自身の思いや考えなども高まっていきます。この題材をもとに、エコデザインやユニバーサルデザインなど、明るく豊かな生活を築くための学習が中学校美術において展開されていくのです。(図7)

日文 図画工作を通じ、子どもたちがつくる面白さ、生活を豊かにする喜びを十分に味わえることを願っています。



(図5) 新版教科書3・4下P24・25  
「とび出すメッセージ」より



(図6) 新版教科書5・6上P32・33  
「使って楽しい焼き物を」より



(図7) 新版教科書5・6下P33「ドリームプラン」より

# 「見ることを楽しむ」活動へ

横浜国立大学 大泉義一



(図1) 新版教科書1・2下P28・29  
「大すきな たからもの」より  
子どもが能動的に見ることをが楽しめる学習活動へと拡張させた。

## 「鑑賞する」ページの基本的な考え方

新学習指導要領では、「B鑑賞」という「領域」は、「作品などを鑑賞する活動を通して、次の事項を指導する」と記され、その内容が「鑑賞の能力」の観点から整理して示されています。つまり、活動することが学習内容なのではなく、活動を通して子どもの「能力」を育てるための教師の指導内容が、(子どもにとっての)学習内容であることが明確に示されているのです。さらに今回、新たに加わった〔共通事項〕の学習内容とは、「表現」と「鑑賞」という領域を結び付ける「能力」であると考えられます。このことから図画工作科の内容は、教師の指導的視点から領域で区分されたものではなく、子どもが発揮する「能力」の表れの様態から相互に関係をもつものとして理解することができるでしょう。

以上のような子どもの発揮する「能力」の視点に基づいて「鑑賞」ととらえ直してみると、「表現」との一体的な関係性が明らかになります。さらにこのとらえ方に基づくならば、「鑑賞」は、以下のような学習活動の 카테고리によって整理することができます。

第一のカテゴリーは「表現に埋め込まれた鑑賞」です。これはさらにその対象によって「相互鑑賞」と「自己鑑賞」に分類することができます。第二のカテゴリーは、鑑賞の学習活動が表現の学習活動へと直接接続していく「表現に接続する鑑賞」です。そして第三のカテゴリーは、「独立した鑑賞」であり、その対象の有り様によって「美術作品の鑑賞」と「能動的感覚の発揮としての鑑賞」とに分類することができます。

このように整理することによって、とかく教師の視点に基づいた「領域」に狭く押し込められがちであった「鑑賞」を、子どもが能動的に「見ることを楽しむ」学習活動へと拡張することができるでしょう。(図1)

## 「鑑賞する」ページの特徴について

それでは、上で述べた基本的な考え方について、実際の題材を通して具体的に考えてみます。

### 1. 表現に埋め込まれた鑑賞

子どもは表現活動を行いながら、常に鑑賞の能力を働かせています。さらにその場面には、次のような様態が考えられます。

#### ①相互鑑賞

「A表現：造形遊び」「A表現：絵や立体、工作に表す」の題材における学習活動のプロセスには、子ども同士がお互いの表現を見て楽しんだり味わったりするような相互交流が見られます。この学習活動は、題材の学習展開における終末において短時間で行われることもあります。1単位時間の学習活動として扱うことによって、「鑑賞」の学習活動として位置づけることができます。

着てみたいな。



(図2) 新版教科書3・4下P12  
「めのにえがいたら」より  
表現題材においても、相互鑑賞の様子を掲載している。



(図3) 新版教科書1・2上P30・31  
「なにになるかな」より  
表現のプロセスの中にある自己鑑賞の姿を積極的に掲載。



(図4) 新版教科書3・4下P18・19  
「ここには、きつといるよ」より



(図5) 新版教科書5・6上P36・37  
「アート・レポーターになって」より



(図6) 新版教科書1・2上P22・23  
「かげをうつして」より

教科書で扱われている「表現」題材の誌面には、このような「相互鑑賞」の様子が掲載されています。(図2)

## ②自己鑑賞

子どもは、表現を行うプロセスにおいても絶えず鑑賞の能力を働かせています。例えば、版画で試し刷りをしたものをじっと見つめて、次にどこをどのように彫ればよいかを決めるなどしているのです。このような姿は、まさに「表現」と「鑑賞」とがスパイラルに関係し合うことによって、造形的な創造活動の能力が高まっている瞬間であると言えるでしょう。

教科書の「表現」題材の誌面にも、こうした子どもの「自己鑑賞」の姿が掲載されています。(図3)

## 2. 表現に接続する鑑賞

作品などから子どもたちが味わっているよさや美しさなどの体験を、表現活動へとつなげていくことによって、鑑賞の能力をより一層高めることができます。

例えば、教科書に掲載されている「ここには、きつといるよ」(3・4下)という題材がこれに該当します。子どもたちにとって身近な鑑賞の対象である学校内の場所にふさわしい“住人”をつくり、そっと置いてみます。表現と鑑賞が一体化した学習活動です。(図4)

## 3. 独立した鑑賞

これは、鑑賞の能力の育成そのものに学習活動の目標が設定されるカテゴリです。さらに、その対象から以下のように分類できます。

### ①美術作品の鑑賞

子どもにとって親しみやすい美術作品を対象にした鑑賞を通して、鑑賞の能力を育てようとする学習活動です。ここには、美術館との連携によるギャラリートークやアートゲームの実践なども含まれます。

日文 図画工作には、「アート・レポーターになって」(5・6上)が掲載されています。自分が鑑賞して、見たこと、感じたこと、考えたことなどを、友だちに紹介し、話し合うことを通して、自分なりの見方・感じ方を養うとともに、高学年らしい批評的な思考を培うことを目指しています。(図5)

### ②能動的感覚の発揮としての鑑賞

子どもにとっては取り囲む環境全てが鑑賞の対象であるととらえるならば、「感じること」自体も鑑賞の学習活動足り得ます。低学年の子どもにとっては、自分が気に入った形や色の石を集めるなど、「見る・触る」といった感覚に基づいた行為自体が目的化されています。これは、子どもたちが環境に対する感覚を存分に発揮している状態を示しているのです。

教科書には、「かげをうつして」(1・2上)が掲載されています。「影を写す」という活動を通して、子どもにとって身近な形や色などの面白さを味わう活動です。(図6)

以上のように、「鑑賞」を「見ることを楽しむ」活動ととらえることで、「鑑賞」の授業が多様に実践されることを期待しています。